

# 「サルサはキューバの音楽ではない」

## ハバナからニューヨークへ

外国語学部 スペイン語学科4年 畑山 敦子

はじめに

「ラテンといえばサルサ、サルサといえばキューバ」と多くの人が常識としている。サルサは踊りやすいリズムとテンポや、明るいサウンドが人々に受け入れられ、日本でも人気があるミュージックのひとつである。

しかしある時、驚くようなことを聞いた。昨年、在日キューバ大使館の方にお話をうかがう機会があった。その時そのキューバ人男性は「サルサはキューバのものではない。ソンこそ、キューバ人の愛する音楽だ」と言っていた。それ以来、なぜキューバの人がサルサを否定するのか疑問に感じた。

キューバンサルサといわれているサルサは日本のCD店でもコーナーが設けられているほど一つの音楽ジャンルとして定着している。にも

かわらず、当のキューバではサルサを自分たちの音楽ではないと考えている人が多くいる。私の論文のテーマはこの一つの疑問から始まった。昨年の夏、実際にキューバへ行った時、どのCD店にも何千枚とサルサのCDが置いてあった。ますますキューバとサルサの関係について疑問がわいた。

調べてみると、サルサが初めて演奏されたのはキューバではなかった。またサルサは様々な音楽の影響を受けて今の形になっていた。サルサがキューバ産ではなく、キューバ人以外の人々によって育まれた音楽であるとすればそれはキューバの音楽ではないといえるのではないだろうか。そこでキューバ音楽とサルサそれぞれの成り立ちに着目し、サルサがキューバで形成された音楽ではないこと、第二にサルサと

キューバの代表的な音楽ソンとの間の関係とその違いを明確にしていきたいと思う。

### 1、キューバ人が「私たちの音楽はソンだ!」と主張する理由

#### 1 キューバ音楽の成り立ち（前半）

##### 【原始〜一九世紀】

最初に音楽をキューバへ持ち込んだのは、アフリカからスペイン人によって連れてこられた黒人奴隷たちであった。もともとキューバには農耕を営む穏やかなタイノ族やシボネイ族などの先住民が住んでいた。しかし一四九二年にスペインのイザベル女王の援助を受けコロンブスがキューバ島に上陸し、一五一年にはベラスケス率いる遠征隊によって征服された。スペイン人たちは先住民をほぼ皆殺しにした。疫病や飢饉のせいもあり、先住民は絶滅に追いやられた。その後、スペイン人たちが新たな労働力として連行してきたのが黒人奴隷たちであった。

その後キューバは一九〇二年まで約4世紀もの間スペイン人によって支配された。スペインから来たヨーロッパ系の白人とアフリカからの黒人たちが共に暮らし、その間で子どもが生ま

れ、だんだんキューバは混血社会となっていた。音楽も二つの異なった文化の出会いによって生まれた。こうした白人と黒人の混血している特殊な人種構成によって生まれたのがキューバ音楽のルーツである。

また、ハイチというキューバの東方に位置する島(現在のハイチ共和国)はキューバと同じくクリストファー・コロンブスによって発見されスペインに植民地化された。一六九七年のライスワイク条約により、島の西側三分の一はフランスの領土となった。フランスによる支配を受けていたので、文化もフランスから伝わった。そのためハイチに近いキューバ東部、つまり今のサンティアゴ・デ・クーバにはハイチからのフランス文化が入り込んだ。こうしてキューバの文化は複数のルーツの下で発展した。

キューバの民衆の間で昔から音楽が盛んになっていったのは一八世紀後半からだ。キューバを支配していたスペイン人の音楽というのは、ヨーロッパから伝わったクラシックなどの優雅な曲、ダンスミュージックだった。そこに黒人たちのようなアフリカのリズムが加わり、キューバ音楽の融合が始まる。四拍子の最後の一拍の部分にわざとビートをいれず、四分の三拍子のような不思議なリズムがう

まれた。一九世紀前半から半ばにかけてこの独特のはねるようなリズムが、ハバナで踊りの音楽として流行する。これが「ハバナの踊り」「アバネーラ」(＝Habanera)である。

この少し前、世界初のヒット曲といわれている曲がキューバの音楽を元に生まれる。スペイン人の作曲家セバスティアーン・イラディエール(一八〇九〜一八六五)が「ラパローマ」という曲を発表した。この曲はスペインのマドリッド発だが、リズムは先ほど出てきたアバネーラのリズムをもつ。最初は人から人へと噂が広まり、一九〇二年に米国でレコードが初めて商品化されてから、「ラパローマ」は世界各国の楽団や歌手によって録音され、発売されるようになった。

同じく黒人が奴隷として移り住んでいたアメリカでは、黒人たちのリズムや音楽は注目されずに消えていった。黒人の音楽が受け入れられたキューバとアメリカの違いは何だったのだろうか。キューバでも黒人たちは奴隷という立場にありながら、音楽においては彼らの方がヨーロッパ音楽を取り込み、自分たちのものにしていった。その例がルンバである。ルンバは今ではほかの国の音楽も含めた広い範囲で音楽のジャンルの一つになっているが、最初はハバナ

市街の黒人コミュニティの間で踊りの音楽として演奏されていた。アフリカで神々に捧げるサンテリアなどの黒人宗教音楽から派生したこの郷土娯楽音楽は、休日、誕生日、結婚式など様々なパーティーで踊る時に使われていた。キューバン・ルンバ(CubanRumba)とも呼ばれる。

#### 2 「キューバ音楽」ソンの形成

こうしてキューバでは黒人のリズムに白人のヨーロッパ音楽が混ざり合うというほかでは見られない音楽発展の道をたどった。一九一〇年代から、音楽はさらに完全な融合の形になった。それが「ソン」(Son)である。アバネーラは白人が黒人のリズムを取り入れてつくった音楽、ルンバは黒人が「スペインらしい」メロディーを加えて作りあげたものだった。しかし、ソンはどちらの音楽も対等なバランスでベースとなった音楽だ。混血社会の中で出会った二つの音楽が一つになった「キューバ音楽」なのである。ソンはアフリカの踊りの影響を受けているため、キューバン・ルンバと同じようにダンス音楽だ。身体全体で音楽を楽しめるこのノリによさが、キューバ全体で人気を得る要因だったのではないかと推察される。

ソンの特徴は、前半部分がヨーロッパ的なメロディーの主題部分を持ち、モントューノと呼ばれる後半のパート部分の繰り返しがアフリカのリズムを元に行っていることだ。この繰り返しの部分を演奏者は自由に表現できる。この演奏の自由さがアフリカ音楽の伝統を受け継ぐ部分である。ソンの基本的な演奏楽器の構成はトレーズ（小型のギター）、普通のギター、ベース、マラカス、リズム担当のクラベス（棒でできた小さな拍子木）、ボンゴ（小さなタイコ二つ）でそれぞれ一人ずつが担当した。このうちの一人が歌い手をつとめ、バンドとなる。この六人の構成をスペイン語の「六人組」（「セステート」）からとって、セステート・アバネーロという名のグループが生まれた。彼らは最初キューバ東部でスペイン伝統の音楽を演奏していたが、ハバナにやってきてからはキューバン・ルンバのアフリカの部分を受け入れてさらに音楽の融合に力を入れた。ソンの最もポピュラーなバンドである。

### 3、世界に広まる 「キューバ音楽史 後半」 「一九五九年 キューバ革命」

一九二〇年代に入って、この六人組にトランペットが加わるようになり、ソンのバンドは

「七人組の」（「セステート」）のセステート・アバネーロが多数となる。ソンから生まれた最大のヒット曲、「南京豆売り」（ドン・アスピアス楽団）は一九三〇年代に生まれた。この曲は米国を始めとして世界中でヒットとなった。ピーナッツ売りの呼び声を元に作られたが、最初はソンとして演奏されていた。しかしアメリカではルンバと呼ばれ、本来のキューバン・ルンバとは全く違うにも関わらず、「ルンバ」の音楽ジャンルとして浸透した。これらはボールルーム・ルンバとも呼ばれた。現在では混乱を避けるため、キューバン・ルンバを「Rumba」、ボールルーム・ルンバを「Rhumba」と表記することが多い。

この「南京豆売り」のヒットを皮切りに、キューバ音楽は米国や世界にブームを巻き起こしていった。五〇年代ではキューバ音楽といえはマンボ、といわれるほどマンボが世界中で大々的にヒットした。ルンバの他にも「ボレロ」というダンス音楽もキューバから発信され、流行した。

キューバのミュージシャンたちは次々とアメリカで活躍を始めるようになる。彼らはハバナから片道切符でNYにやってきて、スパニッシュ・ハーレムや、ブルックリンやブロンクス

のラティーノスたちのコミュニティに移り住んだ。ハーレムの南にあったスパニッシュ・ハーレムには、一九二〇年代ごろからプエルトリコ人の移民たちが集住し、最初は「エル・バリオ」(El barrio 地区)と呼ばれていた。そこにキューバ人のミュージシャンたちが住みついた。彼らはナイトクラブやダンスホール、ホテルのボールルーム、深夜営業のバーなどで演奏活動をして人気を博した。有名なのは、チャランガ楽団というバンドだ。彼らは一九五八年にニューヨーク中のクラブを渡り歩いてライブを行った。コロンビアレコードとビクターレコードという二つのレコード会社(その当時は蓄音会社)の発展もあり、次々とキューバ人ミュージシャンがレコードを出した。

キューバ音楽がニューヨークを発端にアメリカから世界へと広がった主な例として、次の二つが挙げられる。「チャチャチャ」と「パチャンガ」だ。チャチャチャはヨーロッパ的な要素の強いダンス音楽だ。キューバのあるバンドを脱退した二人のバイオリニストが一九四八年に新たなジャンルを確立したのが始まりである。

チャチャチャはキューバでは一九三〇年代に流行した。その後、アメリカの曲をチャチャチャでアレンジした「ティー・フォー・

トゥー・チャチャチャ」という曲が世界中でヒットする。

また一九五九年のキューバ革命直前に流行ったパチャンガは、キューバ系アメリカ人のソングライター、エドゥアルド・ダビッドソンがチャチャチャよりも自由でファンキーなリズムのダンスミュージックとして生み出した。パチャンガは革命に熱くなっていた当時のキューバ人の若者に歓迎された。その後一九六一年に彼はアメリカに渡り、パチャンガはニューヨークでも人気を博した。プエルトリコやドミニカ共和国からの移民たちが活発に演奏した。キューバだけの人気だった音楽も、アメリカへ渡った後にヒットした。この二例はサルサが生まれる少し前から、すでにキューバ音楽が国外輸出され、注目されていたことを示している。(一〇ページ表「キューバ音楽が世界に広まった例」参照)

### 4、革命後に受け継がれている音楽

革命後のキューバでもミュージシャンたちの音楽活動は続けられていた。世界に広まるような音楽は生まれなかったものの、革命前までのソンやチャチャチャなどの音楽は受け継がれていた。九〇年代になってそれらが一気に注目さ

れたのが「ブエナビスタソシアルクラブ」だ。一九九六年にキューバの老ミュージシャンたちを集めてセッションを行い、それを米国人の有名ギタリスト、ライ・クーダー氏がまとめCD化した。それまであまり注目されていなかったキューバ音楽の味わい深さ、すばらしさが世界中に受け入れられ、「ブエナビスタ」は一九九七年のグラミー賞を受賞した。その2年後には彼らの活動を追ったドキュメンタリーがヴェイム・ベンダース監督によって映画化され、さらなるブームとなった。

「ブエナビスタソシアルクラブ」とは、メンバーのうち多くが革命前の一九二〇年代に在籍していた会員制高級音楽クラブのことで、その名を取ったグループ名である。キューバ音楽が最も活発に楽しまれていた頃の名残からつけられたのだろうか。

彼らが演奏しているのはキューバ音楽の黄金時代の名曲ばかりだ。それはサルサとは全く別の音楽である。彼らはの中には革命後も音楽活動が続けていた人もいれば、音楽とは無縁の生活をしており無名だった人もいる。最近(二〇〇六年三月)亡くなったブエナビスタのメンバーの一人、ピオ・レイバはフアハルド楽団という有名なバンドで活躍し、ソンのリズムを極めた

人だ。彼らはサルサと何の関係もない。サルサは彼らが活躍していなかった時代に、ハバナを一度も離れたことのなかった彼らが行ったことのないニューヨークで生まれたからである。

### 2、それではサルサはどう形成されたか？

#### 1、キューバ革命後、ニューヨークにて (一九六〇年代)

一九五九年一月一日、フィデル・カストロを指揮官とする革命軍が蜂起しキューバ革命が成功した。革命軍が時のバチスタ政権を倒してハバナを制圧し、革命は成功した。そして米国との国交は断絶されたが、音楽の交流は水面下で続いた。キューバからは新天地を求めて何人もミュージシャンがニューヨークへ亡命した。国民的人気のあった女性歌手、セリア・クルスもその一人であった。彼女を始めとするラ・ソノラ・マタンセラ(一九二〇年代から活躍していたソンのバンドで、リーダーら三人のボーカルのコーラスがソンを象徴している)、盲目のカリスマギタリストで独特の重厚なサウンドを持つアルセニオ・ロドリゲスらキューバ人ミュージシャンたちは、ニューヨークで新たな音楽の可能性を探っていた。

一九六四年、プエルトリコ人ニューヨークのフルート奏者ジョニー・パチエーコがラテン・ミュージック専門の「フアン・レーベル」を仲間と立ち上げた。その後彼は、キューバ音楽がニューヨークで受け入れられるために、変化を遂げさせる重要な役割を果たす。パチエーコとセリア・クルスのファーストアルバム「セリア&ジョニー」（一九七四年）はラテン音楽を知らなかった上流社会にも新たなミュージックとして受け入れられた。彼らが持ち込んだソン、ダンソン（ソンと同時期に生まれたヨーロッパの影響の強いダンス音楽。チャランガというバイオリン、フルートなどのバンド編成が特徴）などキューバ音楽はエキゾチック・ミュージックとして注目を浴びた。

ここで忘れてはならないのがプエルトリコ人の存在である。プエルトリコは米国の属国として政治的に支配されている。一九五二年にアメリカの自治領となつてからも、本土の国民とは差別される不遇の時代を送っていた。一方、古くから文化の面では近くのラテンアメリカの伝統を多く引き継いでいる。島の住民のほとんどはスペイン語しか話さない。キューバ音楽も早くから伝わっていた。一九六〇年代以前もニューヨークでキューバ音楽をやるミュージ

シャンは多くいた。プエルトリコ人の優れたミュージシャンも多数輩出された。その一人、ラファエル・エルナンデス（一八九六―一九六五）はキューバ発のルンバ・ブームにのり、自身も「カチータ」や「エル・クンバンチェロ」など数多くのヒット曲を世に送り出した。

一九六〇年代の公民権運動の後、移民を規制する動きがなくなり、当時何十万人ものプエルトリカンがニューヨークへ移り住んでいた。彼らの音楽もルーツはキューバ音楽である。キューバから亡命したミュージシャンたちと彼らプエルトリコ人によつてニューヨークにキューバ音楽が持ち込まれた。特にプエルトリコ系のミュージシャンたちはキューバのソンを演奏し、ニューヨークのミュージック・シーンの中心で流行らせた。中でもティト・プエンテはキューバ人のセリア・クルスと共に絶大な人気を誇った。

## 2、ソンと様々な音楽の融合

ソンやその他のキューバ音楽は変化を遂げる。ニューヨークにはさまざまな故郷からやってきた人々の音楽で溢れていたのだ。

ニューヨークは最初から移民のつぼだ。氷河期の氷が溶けてヨーロッパから民が移動して

きたのが始まりである。今や世界屈指の大都市となるまでの発展はインディアンによつてではなく、移民たちの開拓、労働の末に築き上げられた。ニューヨークは様々な地域出身の人々の集まりであるため、自分たちと同じく新しく来た人々や文化を受け入れてきた。一九五〇年代はジャズ、アフロ、その他さまざまな音楽の宝庫だった。先述の移民規制排除により、ドミニカ、ジャマイカ、タヒチ、キューバなどカリブ海諸国から多くの人々がアメリカへ渡つてきた。（一〇ページ 表2参照）一九四〇年代と比較して、一九七〇年代から八〇年代にはヒスパニックの数は倍以上の90万人を超えている。注目すべきなのはその年代に移住してきた人よりも総数が圧倒的に伸びていることだ。

ニューヨーク生まれの「二世」世代の数が激増したといえる。親の出身がラテンアメリカ諸国というラティーノスたちがニューヨークで生活するようになった。彼らはラテンのリズムのニューヨーク・サルサに目覚めていった。

様々な人々や、音楽によつてキューバ音楽は次第に大胆にアレンジされ、六〇年代後半から新たなジャンルを確立させた。たとえば「ジャズ風」のキューバ音楽などであるが、もはやそれはキューバで生まれたものではない。キュー

バ音楽とこれらの音楽の融合はまるでサルサ（ソース）のように「ぐちゃ混ぜ」な音楽だと言われた。言い出した人物には諸説あるが、ニューヨークのストリート・ミュージック誌「Latin NY」の雑誌編集長が七〇年代後半に彼らの音楽を「Salsa」（サルサ・ソース）と表現したという説がある。こうしてサルサ音楽がニューヨークで生まれた。亡命したキューバ人、プエルトリコ人などのラティーノスだけでなくアメリカ人もその魅力にとりつかれた。

## 3、サルサ普及期（一九七〇年代）

それから七〇年代にかけて、サルサはピークを迎える。ニューヨークからアルゼンチン、ペルー、ヨーロッパ、そして日本にも広まった。七〇年代後半から八〇年代にかけては、サルサは歌謡曲的な要素が強くなる。甘いメロディーのサルサ・ロマンティカやサルサ・エロティカがそうだ。この二つはそれまでのサルサをより若者にうける音楽にしようとプエルトリコ人ミュージシャンたちがアレンジした。サルサ・ロマンティカは恋愛をテーマにした曲ばかりで、現在のポップスのラブソングの前身のようなものである。一方スタンダードなサルサのリズムを極めた熟練バンドも生き残った。しかし

サルサはこの時が黄金時代だったが、若者は次第にラテンのリズムをもとにしたサルサを古臭いと感じたのか、より雑種の強いメレンゲという音楽やヒップホップに流れていった。さらさはアメリカのミュージック・シーンから離れていった。

では、なぜサルサといえばキューバといわれるようになったのか。ひとつはサルサを始めた亡命してきたキューバ人や、キューバの影響を受けたプエルトリコ人ミュージシャンの影響が大きい。「サルサもキューバの音楽」と見る人が多いのではないか。また流行を取り入れる意味で、キューバでサルサを演奏していたミュージシャンたちも少なくない。それらがCD化され、キューバ発の音楽として世界に発信された。これらが「キューバン・サルサ」のイメージをつくる要因となつたと推測される。

## 4、コロンビアでもサルサ？

サルサはニューヨークにとどまらず、海を超えてアレンジされていた。ラテンの国々の中でニューヨーク発のサルサがもつとも熱狂的に受け入れられたのがコロンビアだ。コロンビアには「クンビア」という民族舞踊がある。独立戦争時代に、あるバンドがタイコやガイタ（竹

やサトウキビの茎で作った笛）という伝統的な先住民の楽器で演奏した舞踏音楽だ。すその広いスカート姿の女性が火のついたロウソクの束を頭に掲げて踊る。クンビア・バンドは戦争後も活躍が続けていた。

一九六八年にニューヨークから来たピアニスト、リッチー・レイと歌手ボビー・クルースのサルサコンビが最初にコロンビアの首都ボゴタでサルサを流行らせた。その後何百もあるクンビア・バンドが若者の間で人気のあったサルサのアレンジを取り入れ、新たな「サルサ」が生まれた。サルサがニューヨークで流行した七〇年代と同時期にコロンビアでも人気を博した。そのためコロンビア人にはサルサは自分たちの音楽だという自負がある。

## 3、サルサが生まれた背景

### 1 ソンのルーツ

ソンは異なる音楽同士の融合からできた音楽である。白人のヨーロッパの音楽と黒人のアフリカン・ミュージックが互いの文化を受け入れ合い、今のかたちが生まれた。これはキューバで奴隷の身分であった黒人の音楽が認められたことが大きい。差別されていた存在と考えられ

## 2、サルサという音楽

キューバ産の音楽であるソン、チャチャチャなどが革命後に亡命したキューバ人ミュージシャンと共にアメリカへわたった。NYにはすでにジャズやアフロなど他の地域からきた音楽があふれていた。ソンやチャチャチャはそれらの音楽の影響を受けて、ジャズ風にアレンジされたりするところから始まり、やがてそれらの音楽と混合してサルサとなった。そうするとサルサはアメリカで形成された音楽ということになる。

ニューヨークもキューバ同様、移民社会であ

り、さらに多様な民族が住んでいることが関係しているのではないだろうか。

現在、ニューヨーク市の総人口は千九百二十五万四千六百三十人に對し、

- ・ヒスパニックは三百十万千六百二十人、
- ・アジア系米国人百三十八万二千九百九十人、
- ・アフリカ系は三百五十一万五千七百九十二人

がいる。(U.S.Census Bureau 46)

雑多性があり、多種多様な音楽の寄せ集めであることはソンの形成に近いものがある。

だが、アメリカで音楽が成り立つ上でどうしても必要なのが商業主義である。NYでは音楽は人々が楽しむための商品であり、売れる商品でなければやって行けないということは否定できない。

アメリカでは、「懐かしいケンタッキーの我が家」などで日本でもおなじみの作曲家ステイブン・フォスター(一九二六〜六四)が音楽を楽譜や劇で使用するなど商品として売り込んだことがポピュラー音楽普及の始まりであった。音楽を提供して報酬を得るという商業スタイルが確立したのは彼の影響が大きい。そこから売れる音楽をもとめて多くのレコード会社がミュージシャンの発掘に奔走し、ヒット作品も生まれた。けれどそれ以外の圧倒的多数である

リカではマイノリティであるラテン系のキューバ人が白人と対等な立場で音楽を受け入れられたわけではなかった。たとえばジャズは黒人たちの反骨精神が秘められた音楽であった。彼らは音楽が自分たちの誇りである。サルサは自分たちのルーツである音楽を自己主張するわけでもなく、アメリカに完全に溶け込もうとしているわけでもない微妙な混合で形成された音楽ではないだろうかと思う。

八〇年代にはヨーロッパのレコード会社もキューバ人ミュージシャンのプロモーションに関わるようになった。初めてシルビオ・ロドリゲスのLP「日々と花」(Días y Flores)を発売したのはスペインとドイツのレコード会社である。

芽の出ない作品は消え、淘汰されて音楽産業が成り立ってきたという経緯がある。

サルサもより多くの人が親しみやすいように歌に流行を取り入れ、アレンジもソフトな歌詞曲風になっていったのだろう。それを「キューバン（キューバの）・サルサ」としてかたちだけをまねているものがキューバ音楽だと思われるのではないだろうか。キューバ人が商業をベースに考えたこのサルサを自分たちの音楽であるとは考えにくいだろう。金儲けになるかどうかは関係なく、純粹にキューバ音楽を受け継いでいる音楽好きなキューバ人からすると、サルサは自分たちとは異質なものと感じられるのかもしれない。サルサはソンに似ているようだが、違う曲調であることが多い。モントウーノの繰り返しのリズムがなくなりただの四拍子になっていたり、アレンジでマラカスやクラーパーズなどソンと同じ楽器を使用してキューバ音楽の雰囲気をもととしてるように感じられる。厳密な比較はできないが、実際に音楽を聴いて考慮しても同じジャンルであるとは考えにくい。

しかし、そんなキューバにも音楽の商業化

終わりに

**PLUS i 124**

とだ。私もCDを聴いて音楽を楽しむ一消費者として、音楽が誰のためのもののかを忘れないでいたいと思う。

#### ◆参考文献

##### 〈書籍〉

- ・『ポピュラー音楽の世紀』  
中村 とうよう 著  
岩波新書 岩波書店（一九九九年）
- ・『サルサ ラテンアメリカの音楽物語』  
スー・スチュワード 著、星野 真理 訳  
アスペクト社（二〇〇〇年）
- ・『プエナビスタソシアルクラブとキューバ音楽の手帖』 大須賀 猛 編  
水声社（二〇〇〇年）
- ・『キューバを知るための五二章』  
後藤 政子、樋口 聡 編 著  
明石書店（二〇〇二年）
- ・『ヒスパニック||ラティーノ社会を知るための五五章』  
大泉 光一、牛島 万 編 著  
明石書店（二〇〇五年）
- ・『全・世界音楽論』 東 琢磨 著  
青土社（二〇〇三年）
- ・『MUSIC&REVOLUTION cultural change in

socialist cuba』

ROBIN D. MOORE 著

- ・雑誌『月刊ラティーナ』二〇〇六年五月号  
株式会社ラティーナ（二〇〇六年五月一日発行）

##### 〈インターネット〉

- ・米国国勢調査 (U.S.Census Bureau)  
<http://www.census.gov/>
- ・ウィキペディア 日本版ホームページ  
<http://ja.wikipedia.org/wiki/>
- ・ウィキペディア ラテン版ホームページ  
<http://es.wikipedia.org/wiki/>
- ・社団法人 日本レコード協会ホームページ  
<http://www.riaj.or.jp/1900/>
- ・La Paginita chap.com  
<http://www.chapu.com/site/cultura/origsalsa.html>
- ・あつちニューヨーク（ニューヨークの歴史）  
[http://www.at-newyork.com/new-orl-history/new\\_york\\_sources.htm](http://www.at-newyork.com/new-orl-history/new_york_sources.htm)